

國學院大學學術情報リポジトリ

天明三年(1783)浅間災害の語り継ぎの研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 俊明, Seki, Toshiaki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002438

論文の要約

論文題目 天明三年（1783）浅間災害の語り継ぎの研究

氏名 関 俊明

天明三年（1783）の浅間山噴火は、火山災害として地元群馬や長野で大きな被害をもたらし、複合災害として関東一円、さらに東日本に広く影響を与えた。直接被害の及んだ地元地域における火山災害としての側面に加え、噴火災害に派生し飢饉に拍車をかけたり、疫病を流行らせたりしたという社会生活に新たな困窮の要因を生み出した。火山災害に基因し、災害の複合的な側面が存在しているのである。このことから、今日地元において語り継がれる災害の記憶については、単に浅間山大噴火の爪痕というだけでは線引きできない内容も含まれていることから、本論では「天明三年浅間災害」と総称した。

派生する語り継ぎの内容については、火山学・砂防学・歴史学・地理学・考古学など多くの研究領域のアプローチをもつ歴史災害でもあることが特徴に挙げられる。被害を伝える痕跡は「負の遺産」であり、時に人は背け避けたいと思う対象になることもある。しかしそれは、人びとが災害に向き合う役割をもつ「災害の記憶」でもある。そして、過去を知り正しい世論を創る役割をもつ、新たな財産ともいえるべき可能性をもっている。230余年が経過した天明の歴史災害を語り継いでいくために、「野外博物館」という用語を用いるのが適切かどうかは検討が必要だが、遺跡をはじめ各地に伝わる災害地形や伝承、供養碑、文化的行事など一連の関連・派生する事物・点の集合を集約し、それらを語り継いでいく展開の具現化を試みることを本論の目指すところとし、天明三年浅間災害に対し、①近年に発生した震災などとの比較、②歴史災害としての時間経過や時代的な検証、③地域に伝わる民俗的な行事等の位置づけ、④語り継ぎの具現、といった視点を扱った。

第1章では、天明三年浅間災害にかかわる研究史として、この災害を扱うには、学際的な視点が欠かせないことをみてきた。また、郷土史として天明三年浅間災害をみるときに「現状では、個別災害に関して各県史・市町村史レベルでの史料収集が最も進んでいる」といわれているように、通覧するには、自治体誌史が最も重要な文献資料の一つとなっていることは言うまでもない。また、今日、諸研究領域から援用される、体系化された古記録の史料集大成を編した浅間山噴火研究の第一人者の故萩原進の功績があることにも触れた。地震学に派生した我が国の火山学が、火山の噴火現象・噴出物・形態・構造・成因・分布・年代などを研究する近代科学として一世紀余の年月のなかで、天明三年の浅間山噴火がどのように取り上げられてきたかは、震災予防調査会の報告書『日本噴火志』の編纂過程や大森房吉の言動に求めた。

災害からは230余年が経過し、大きく時代は変化を遂げた。人々の記憶から消えようとしていても、災害現象の痕跡をたどることが多くの領域から可能であることを示し、「災害」を核にしながらも人との関わりなど多くの研究視点と各学問領域からのアプローチが存在していることを確認した。地方史・郷土誌の対象として、天明三年の浅間災害は地元で欠くことができないテーマであるのは周知の通りである。さらに、災害研究の対象として総合的に探ろうという災害史を扱う学際的な取り組みの中で、他の多くの自然災害とともに問い直される機会を得ることができるのも事実である。そして本事例からは、①「歴史災害」として時間経過が伴いつつも語り継がれてきている、②過去の出来事を多くの融合領域からアプローチできる学術研究の対象として存在している、③今日の繰り返し見舞われている災害の爪痕を乗り越えるヒントを歴史災害という時間軸の中から漉しとるこ

とができる可能性を含んでいる、④文化や習慣といった地元の暮らしに連関する事柄をたどること
で次の世代に語り継ごうとするときのヒントにもつながる、といった視点を得ることができる。だ
が、研究史としてみてきた本章の中でも、これまで領域間を横断してそれぞれの分野の成果を社会
全体の可能性につなげていくといった枠組みをもった研究は、まだ萌芽しているとはいえ、この
視点を僅かながらでも体系的にみていこうとすることは今後とも求められることである。

第2章では、天明三年浅間山大噴火の実相として、噴火のあらましを史料や周辺領域の情報を結
びつけ、考古学的な視点を中心に概観した。群馬県内で特徴的にすすめられている発掘調査での成
果を踏まえ、どう見立てられ考察がなされたか、あるいは、文献や周辺領域の研究とどのように結
びつくかを記述した。古文書や発掘調査で見つかる実資料からは、伝聞との食い違いやいくつかの
誤謬があることにも触れた。当時の史料には、無慈悲で理不尽な自然災害を前にしても正確に情報
を記録しようとした当時の人々の強い意志が存在している。懐の大きさと、人間にとって自然は余
りに大きいと、せめてものなせる策としたら、正確に記録を残すことでもあり、230余年前の出来事
を甦らせる力ともなっている。発生した天明泥流は流域の村々を呑み込んだ。地点地点で今日すす
められている発掘調査をつぶさにたどっていくと、書き残された古文書の記録との整合は勿論、書
き記された泥流の流下現象や当時の人々の見聞との一致と誤謬を確認することも可能にしている。

学問領域を越えた視点として、火山噴火の大きさは、その噴火で地表に噴出したマグマの総量で
比較するもので、冷静に噴火規模を比較することで、天明の飢饉の気象的な側面は浅間山噴火の降
灰による影響を受けつつも、地球規模の異常気象を遠因として見ていかなければならないことに言
及し、同じ時期に発生した天明の飢饉やフランス革命と天明浅間山噴火の影響についても、歴史学
の一部で安直な言及をされたことへの抑止の意味合いを込めた。

第3章では、「天明三年浅間災害」という歴史災害発生の経験と語り継ぎが、地元群馬の減災文化
の背景となっているのではないかという提起をもとに、語り継ぎの時間軸を可能な限り忠実に復原
し、その過程を捉え直すことが必要なのではないかという出発点を示した。地元に残される間口の
広い情報を項目として分類整理しようと試みた。多領域にわたる関連事項が存在することを示すこ
とで、多くの視点から出来事を振り返ることの可能性や公開・展示への取り掛かりの糸口を示すこ
とができる。残された個々の事項に着目することに加え、出来事を巡る人と人との関係に注目する
視点を加えていくことは、同時期に生きた人々の間における「災害の記憶」と時系列上の記憶の受
け渡しを確認することにつながると考えた。「語り継ぎの時間軸」とした一覧表の作成からは、多く
の要因を絡め、検討していくことの可能性を確認するに至った。天明三年浅間災害の事例を通して、
歴史災害の語り継ぎの法則性を渡し、出し浮かび上がらせるという更なる段階の課題につなげられ
るものと考えた。

第4章では、語り継がれてきた事例のいくつかを掘り下げて記述した。史料からみる継続過程で
の記述変化や信仰、地域文化への特化の例について触れた。また、災害からの救済や復興、地名伝
承、供養碑といった語り継がれる要因を示すことができる事例、さらに人物伝や日本の宗教文化と
も重なった語り継ぎの継続性について扱った。

まず、語り継ぎの経過の中で、語りの内容が変化してきている事例を示した。我が国には災害時
の支援に対して、多くの人々が率先して応ずる社会的伝統がある。こういった災害に対する国民性
についても歴史災害の語り継ぎの中から改めて確認でき、天明三年浅間災害の語り継ぎの継続性
の中からも強く評価が得られる点でもあるといえる。近世の歴史災害として災害に対する社会条件が
今日とは異なるとの見方もあるが、当時の地域の有力者は率先して救済活動を行っている点にも注

目したい。救済と復興にまつわる語り継ぎでは、為政者側からの「普請」としての取組の外に、民からの「施し」や地域の有力者・僧・藩主・幕臣といった個人としての立場による救済など、種々の立場における行為や取り組みがいくつもの形に姿を交え、今日に伝えられていることを示した。

また、天明三年を生きた人物、或いは語り継がれた人物伝の中にも、天明三年浅間災害に由来する挿話が登場しており、いくつかの逸話等を記述し、災害像に深まりをもたせた。

慰霊や供養といった造立の目的に加え、先祖が残してくれた文化遺産である石造物には、防ぎきれない自然災害は当然やってくるものとして、過去の人々が舞い降りて語りかけてくれる力を持ち、同時に災禍に備え未来創造への橋渡しの機能をも持ち合わせているといえる。被災直後の生活一辺倒の時期から人々が抜け出しはじめると、犠牲者の慰霊の気持ちを込め、災害を風化させないために災禍の「記憶」が石に刻まれはじめることになる。暮らしに根付いた身近な信仰対象物といえる石造物を通して、人々が災害にどう向きあってきたかを知ることにもつながる。天明三年浅間災害に対しても、多くの意味合いの石造物が確認でき、関係する石造物の一覧を示すと共に、いくつかの視点をもってその例を取り上げた。

噴火という自然現象に対する鎮撫、犠牲者に対する慰霊、宗教者やそれに類する人達の行為、語られてきた由来や今日的な課題などを含めて取り纏めた。そこには、先の東日本大震災でも取り上げられるようになった、大災害において人々の魂が超常現象として出現することの例に倣った取り上げも試みた。成仏できない非業の死を迎えた人の魂が、宗教の行為により魂を鎮められたとする歴史災害の中からの抽出例とし、人々の宗教観にかかわる対応がどう働いたかも確認した。

伝承が信仰や地域文化へと特化した例として、天明三年浅間災害から派生して、現在の多くの信仰や伝統行事、伝統芸能といった文化や習慣へと姿を変えてきたいくつかの実例を挙げ、たとえ文字や人々の記憶から消え失せてしまったとしても、人々の間で今日受け継がれているという点にも注意を注いだ。先の東日本大震災の際にも、地名伝承は被災状況を伝える役割を示す確かな記憶であったことが明らかされている。災害地名に着目してその景観的特徴を知っておくことの必要性も、昨今注目される場所である。天明三年浅間災害に由来する地名伝承について、記憶を継承する意味と重ね、その周辺を明らかにしていくことの意義にも言及し、実例を示した。

「周年行事」には、人びとに災害供養の気運を高めさせ、新たに出来事を捉え直す契機となる機能があり、伝統芸能などの記念日には、縁日的な空間が準備されることになり、追悼や記憶の継続に重要な意味合いを持つようになる。そのような行事の繰り返しや時間経過により、想起と忘却を繰り返しながら、人びとの災害に対する記憶は変容していく。いわば、こういった行為には自然と出来事を思い返すことができるようになる仕掛けが組み込まれていることにもなり、「社会的知恵」と呼ぶこともできる。例えば、前章で扱った「語り継ぎの時間軸」で集約した文化年間の33回忌にあたる年代の背景としてこの時期を見ていくと、新たな掘り起こしとも言える纏わる出来事が確認できる。

鎌原村で犠牲となった477名に手向ける「三十三回忌供養碑」は、高遠の石工の手により刻まれたもので、四角柱の塔身4面に犠牲者の法名が刻まれている。激震被害地の鎌原村で、最初に供養塔が建てられたのが、この文化12年(1815)といわれている。33回忌を迎えるにあたって、ようやく鎌原の人たちに、亡き先祖や家族を供養する余裕が生まれはじめたという意味合いが込められていると考えられる。被災した先祖供養の気運の高まりとして、関係者が犠牲者に向き合うことができるようになったという語り継ぎの真意が含まれているモニュメントでもある。

さて、天明期を代表する文人・狂歌師である蜀山人(大田南畝)は、『半日閑話』に、大噴火で地

中に閉じこめられてしまった人たちが33年後に救出されたという話をあたかも実話のように創作し記述した作品を残している。奇跡物語につくりあげられたこの史料は、33回忌という供養の節目に結びあわせて、世に起こった災禍を自身のフィルターを通して表現したものである。

また、この時期を迎える頃になって、趣の異なる絵図が新たに描かれるという指摘がある。掛け絵として描かれた絵図『天明三年浅間山大焼絵図』は展開できる形状を呈し、掛け絵が折り畳まれさらに三つ折りになっていることに着目できる。つまり、携帯性の機能が想定でき、絵図作成の意図を「天明三年の噴火から30年以上たった文化期頃、地域の中で多くの人に噴火の様子を伝えるために作成」といい、「移動させながら地域内部の多くの人に閲覧させるという目的で作成された」特異な絵図であると推定されている。この外にも記録文学作品の刊行について、着目すべき点が見出せる。高崎田町の女流文学者羽鳥一紅により、浅間押しの3か月後に執筆された『文月浅間記』である。版本は、彼女が没して20年後の文化12年（1815）に刊行されている。この時間差は、前述の絵図と同様に33回忌の節目に向け、天明三年浅間災害が人々の間で関心を再びもたれるようになったという気運や出版事情があった証として、語り継ぎを系統化しようとする時間軸の上では大きな意味のある視点である。加えて、この頃山形出身の数学者会田安明は、著書『諸約算題集』の中に、天明三年の浅間山の砂降により堆積した積石数についての算題を記している。「浅間山が焼けた」という社会的な出来事は数学者をも刺激して、その算術問題に登場させているのである。

33回忌を迎えられるこの時期に、時間経過の中で忘れられていく噴火のあらましを説明し語り直すという、社会の中での思い起こしがなされていたという動向を示す史料といえるものの存在が確認される。このように、この噴火に伴う災害は、社会に大きく取り上げられる出来事であり、話題性をもつ出来事であったことが意味付けられる。また、諸領域の事例の中から、天明三年浅間災害の語り継ぎが回忌供養の時期を契機とし、新たな語り継ぎが呼び起こされたことを検証することに繋がった。このことは、我が国固有の宗教観と結びついて基因することが、災害の語り継ぎの中で抽出され、この核心となる一例となっている。

第5章で火山災害と博物館の関連を概観した。全国に存在する「火山系列の博物館」には、火山自体に加えフィールドミュージアムとして簡単には目にはできない被災遺構などの「屋外展示」としての存在などが特徴に挙げられる。ジオパーク構想などとも関わり、来訪者にとって、実物を目にする事で火山への認識や観光、防災、環境保全への認知度向上の効果を生みだしていて、住民同士あるいは来訪者との触れ合いが深まるという図式につながっている点なども確認できる。そこには、博物館の理念を実現する強い意志と豊かな経験をもった運営者や学芸員の活躍があることも忘れてはならない点である。火山情報啓発のための「火山を知る」活動、館のアウトリーチ活動などに精力的に取り組んでいるマンパワーが、住民の地域博物館に主体的に関わろうとする状況をつくり出し、観光のみならず住民意識の啓発などの意味合いからも、「館が地域や住民にとってなくてはならない存在」となっているという地域博物館経営の意義を満たしていることが感じられる。火山系列の博物館の一覧からは、「火山」は広い間口を網羅していることがわかり、多くの領域が今日の博物館資料になり得ていることがわかる。

第6章では、「風土記の丘」構想による遺跡保存の再検討を試みた。個別の事例や経緯を再考することから、複数の史跡を有機的・系統的につないでいく新たな理念が生み出されるなど、それまでになかった「サイト・ミュージアム」の初現とも評価される広域保護の効用などが認められた。既に事業が終了し新たな段階を迎える中で、時間を経てもなお更なる理念を生み出し遺跡保存の展開を試みようとする動きは、本論で扱う災害の記憶を語り継ぐ展開においても、情報発信し人々の新

たな地域啓発に繋げていく方向性として大いに参考となる。「フィールド・ミュージアム」的な発想や「いかに情報発信するか」を整えていくことの視点と重要性を確認した。

第7章では、全体の纏めとして語り継ぎの具体を目指すことをねらいとした。発掘された「鎌原村」周辺は、現在もこの災害を語り継ぐ多くの事物が残されている場所である。同じように、現在の孀恋村鎌原から50km下流の渋川市川島の地中に眠る「川嶋村」も甲波宿祢神社をはじめ村の広い範囲が天明泥流に埋まり、吾妻川下流域の中では特に大きな被害に見舞われた場所である。書き残された絵図の存在、史料に書き残された地点情報、発掘調査の事例、地域住民の関心度等、鎌原村の例に勝とも劣らない「地中に眠るムラ」としての要素を包括した場所である。現在この周辺は、比較的開発も進んでおらず旧地形も残されている。地域を訪れた時に「天明三年」を想起させることができる地点や情報を取り上げ、浅間災害語り継ぎの具体を目論むことができる候補地の一つと考えられる。今日的な震災遺構の課題や災害伝承・遺構保存や集客性、社会的な関心などを整理し、緩やかに諸領域と結びつけつつ遺跡の保存の展開を目途とする事例とした。

また、遺跡を野外展示の具現とするためには、天明三年にかかわる足跡がたどれる場所として把握させ新たな段階へと進めることの必要性は、同じ火山災害という災禍によって一端は地上から姿を消し、再び蘇り世界中の人々に注目されている南イタリアのポンペイ遺跡の具体例について概観することで参照とした。

関係資料などに関して大学や研究機関と連携したり、散在するモニュメントや地形・遺構などを結びつけたりする展開は、Webを用いるというヒントが挙げられる。地域に広がる建物には収まりきらない展示物やフィールドを効果的に博物館資料として展開させられる可能性を有し、火山や災害、ひいては語り継ぎに関するテーマを扱う課題型展示にもおいても大いに検討されるべきであろうと思われる。

本論を通して、今日的な視点で展開されている史跡整備や風土構想としての可能性を模索する活動例を概観し、天明三年浅間災害を語り継ぐ展開に資するものとしていきたい。このことは、「地元学」という言葉の提唱の中にもあるように「この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける」ことでもあり、時の断面を問い直す取り組みとして、天明三年浅間災害を地域史の立場から眺め直していくための土台ともなる部分であると考えている。

以上、歴史災害との視点から、本論では考古学及び援用する周辺領域を通して、災害の記憶の語り継ぎと博物館学の接点を見出そうと試みた。①「天明三年浅間災害」を俯瞰することとして、歴史災害が今日まで伝えられる事物の「草の根的」な情報の集約作業、②「火山」や「遺跡」をキーワードとし、火山に関する展示や遺跡保存の先行事例を通覧するための基礎作業として「我が国の火山系列の博物館」と「風土記の丘」構想について概観、③語り継ぎ活動展開の具現化のための布石として地点情報を取り上げ模索すること、の3つを構成の柱とした。

また、火山学・歴史学・歴史地理学・考古学・砂防学等々の研究諸領域で別々に扱われていた歴史災害像を、横断する複眼的な思考によって、背景にある人々の思いや社会の姿を見つめ直し、事実・経過の集積という形で取り纏めていく展開を試みるのがここでの課題であり、歴史災害を源とする「語り継ぎ」の研究として、本論がその契機となることを期している。